写真1　小林樫ノ木1号墳（南から）

ふるさと御所 文化財探訪

⌘其の四十⌘

古墳時代〈28〉

葛城県の成立（5）

巨勢山古墳群の性格⑤

文化財課
☎60-1608

総数700基からなる巨勢山古墳群について、平成23年10月号で2つの命題を提示しました。1つは、なぜ葛城本宗家滅亡後においてむしろ、日本最大級の群集墳となるまでに基数がふくれあがったのか、ということ。2つめには、巨勢山古墳群に葬られたのはどのような人々であったのか、ということでした。

前号で検討したとおり、巨勢山古墳群の場合、擬姓的同族集団関係によってこれだけの規模の群集墳が形成されたとする白石太一郎さんの考えには無理があります。そこで改めて注目したいのが、巨勢山古墳群では支群ごとに個性の違いが著しいという特徴です。早くから横穴式石室を採用する支群があると思えば、一方で7世紀近くまで木棺直葬を採用する支群、あるいは渡来系の要素の目立つ支群など、実に多様な集団が巨勢山古墳群には葬られていることが分かります。

そして、それぞれの集団に対して墓域は与えられるもの（11月号）であり、また集団はときにより再編され（12月号）ました。それを可能とすることができるのは、多様な集団の上位に立つ権威の存在です。

この権威の性格を考える上で重要なことは、葛城本宗家滅亡直後にこの地域は朝廷の直轄地、葛城県として管理されるようになることです。

その中に多様な被葬者集団が集められた墓地として設定されるのが巨勢山古墳群であり、多様な集団は多様な職能・職掌の存在を示唆しますから、巨勢山古墳群は朝廷に直属した原初的な官僚層の墓地として設定されたとみることができます。

また、金剛葛城山系の東麓には葛城本宗家滅亡後の5世紀後葉に群形成を開始する群集墳が目立ちます。小林古墳群もその一つで、小林樫ノ木1号墳（写真1）からは多数のガラス小玉と共に銀製釵子（写真2）が頭部の装飾として出土しました。また近辺の古墳からは煙突付きのミニチュアカマド形土器（写真3）の出土も知られ、これらは渡来系の要素の顕著なものです。おそらく葛城県そのものの運営に携わる原初的な官僚層たちは金剛葛城山系東麓に葬るなどの区別がなされたのでしょう。

写真2　銀製釵子

写真3　ミニチュアカマド形土器

そして、この葛城県には大和六県（高市・葛城・十市・志貴・山辺・曾布）のうちで唯一、県主が置かれていません。忍海角刺宮で政務を執り、のちには天皇の一人として数えられるようになる飯豊皇女が葛城県主を兼ねたものと思われます。

【参考文献】
拙著『古墳時代の王権と軍事』、2006年、学生社
拙稿「飯豊皇女陵」『天皇陵総覧』、1993年、新人物往来社

（文責　藤田 和尊）

広報ごせ
2012. 2

★公共の場等では禁煙・分煙の徹底を★　子どもたちや妊婦、非喫煙者等を受動喫煙の被害から守ろう！